

小学校体育科のバドミントンに関わる 教材開発（試案）

岸 一弘

キーワード

小学校体育科 ネット型 バドミントン 教材開発

要旨

本研究の目的は、ネット型スポーツのバドミントンを小学校体育科で教材化するための基礎的資料を得ることであり、第 1 に、学習指導要領（学校体育指導要綱を含む）における「ボール運動（ボール遊びを含む）」及び「球技」領域の内容の変遷をまとめた。第 2 に、バドミントンの導入段階と準備段階並びに初期段階における学習プログラム（ドリル）を試作した。今後の課題は、作成した学習プログラム（ドリル）を小学生対象のバドミントン教室等で検証し、必要な修正を加えて教材化することである。

I 緒言

戦前の学校体育の目標や内容を示した「学校体操教授要目」は、1913（大正 2）年に初めて作られて以来、3 回にわたって改訂された。それは、どのような運動をどのような順序で教えるかということを法的な強制力で強く拘束していた。この要目を支えた体育の考え方は、「身体の教育」であった（木原, 2002）。しかしながら、敗戦とともに占領軍の指導の下、新しい体育の進むべき方向が示された。それが「学校体育指導要綱」（1947 年）であり、続く 1949 年から 1953 年に出版された一連の学習指導要領（試案）である。

学習指導要領による小学校体育科及び中学・高等学校保健体育科の目標は、アメリカ体育の中心的思潮であった経験主義教育を基盤とした「新体育」の目標（1947～1953 年）、「体力づくりを重視した」目標（1958～1968 年）、「楽しさを重視した」目標（1977～2008 年）であった（友添, 2010）。なお、現行学習指導要領における体育科の究極的な目標は、「楽しく明るい生活を営むための基礎づくり」を目指している（文部科学省, 2008）。

ここまで、戦後の学習指導要領（学校体育指導要綱を含む）における体育科ならびに保健体育科の目標を概観したが、それらの目標は、学校の教育目標をはじめ、各学年の体育科の目標や授業の計画立案及び学習内容等の拠り所となっていたと思われる。とりわけ1958年以降の学習指導要領には、教育課程の基準としての法的拘束力があるといわれているので、その依拠率は高いであろう。ただし学習指導要領解説は、学習指導要領等の改善の趣旨及び内容について解説したものであり、法的拘束力はない（文部科学省, 2005）ため、例示されたスポーツ・運動（運動遊びを含む）を授業で取り扱うとは限らない。

現行の小学校学習指導要領（文部科学省, 2008a）から、体育科の「ゲーム」及び「ボール運動」領域が「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」で示されている。これは、「児童が生涯にわたって様々なスポーツに触れると予想されることから、特定の種目ではなく、攻守の特徴や「型」に共通する動きや技能を系統的に身につけるという視点から種目を整理したのが理由だといわれている（文部科学省, 2008b）。しかしながら、「ネット型」は中学年で「ソフトバレーボールを基にしたやさしいゲーム」と「プレルボールを基にしたやさしいゲーム」が、また高学年では「ソフトバレーボール」と「プレルボール」がそれぞれ例示されているだけである。

本稿は、ネット型スポーツの「バドミントン」を小学校体育科で教材化するための基礎的資料を得ることが目的であり、まずは、学習指導要領（学校体育指導要綱を含む）における「ボール運動（ボール遊びを含む）」及び「球技」領域の内容の変遷をまとめる。次に、バドミントンの導入段階と準備段階並びに初期段階における学習プログラム（ドリル）を提案する。

Ⅱ 小学校学習指導要領体育及び中学・高等学校学習指導要領保健体育における「ボール運動」と「球技」領域の内容の変遷（主に、バドミントンの扱いについて）

1. バドミントンは「球技」か？

バドミントンは「球技」種目といえるか。最初に、この命題を解決しておこう。結論から先にいえば、バドミントンは「球技」（ボールゲーム）の1つにあげることができる。

昭和初期に出版された『小學校體育』（中島, 1930）には、球技は「ボールを介して行ふ有機的統合體としての團體の競技にして、規程の定める範囲内に於て得點を競ふものである。」（＊原文のまま）と記されている。また、『球技指導法』（佐々木, 1930）にはバスケットボールやハンドボール及びテニスなど17種目が紹介されているが、バドミントンの掲載はみられない。その一方で、わが国のスポーツ指導者用として終戦直後に出版された『球技規則解説集（二）』（小澤, 1948）をみると、テニス（軟式）やピンポン（卓球）などと共に、バドミントンが取り上げられている。なお巻頭のことばとして、「本集に於いては比較的新しいもので、最近盛んに行われて居り、或は近い将来に盛んになるだろうと思われる

ものを多く集めた。」と編者は述べている。当該本は、東京高等師範学校教官の小澤らが著したものであるが、残念ながら「球技」の定義は見当たらなかった。

次に辞典類を調べてみると、英語圏のうち英国では<Sports Game> (Beyer, 1993)、米国では<Ball Game> (小西・南出編, 2001) が「球技」を表す語となっている。また、ドイツ語では<Sportspiel>と表し、「デュアルゲーム（バドミントン、スカッシュ、テニス、卓球）またはリターンゲームと呼ばれる、ラリーの連続によって（一回のボールの接触しか許されない）高い集中力が要求されるものと、チームゲーム（バスケットボール、ファウストバル、サッカー、ハンドボール、[アイス]ホッケー、インディアカ、コルプバル、自転車ポロ、ラグビー、バレーボール、水球）に分けられる (Beyer, 1993)。

さらに、旧東ドイツのシュテラーら (1993) によれば、「ボールゲーム」はゲームの基本理念に従って、「ゴール・ボール型」(Ⅰ. 身体的妨害あり：アメリカンフットボール他, Ⅱ. 身体的妨害なし：バスケットボール他)、「打ち返し型」(Ⅰ. シングルス・ダブルスゲーム：バドミントン他, Ⅱ. 集団対抗ゲーム：バレーボール他)、「投・打球型」(ベースボール他) 及び「球送り・的当て型」(ビリヤード他) の4つの主要グループ(型)に分けることができ、バドミントンは「打ち返し型」に分類されている。

一方で、「ボール」は球形（丸いもの）をイメージすると考えられるため、バドミントンに用いる「シャトル」がボールと見做せるか調べた。その結果、『最新スポーツ大辞典』(1987)によれば、「ボールはつくり方からみて[巻き球系][編み球系][詰め球系][ふくらませ球系][切り出し球系][鋳型球系][果実を用いる例]などに区別される。」とあり、本来的には丸い物の意味があるように推察された。しかしながら、前述の引用と共に奈良 (1991) は、シャトルが球形でないのにボールといえる理由を次のように解説している。「規則正しいリズムでよく弾むボールや安定したフライト（飛行）で長く空中に漂うボールは、人々の長い間の願いでした。その一つの規則正しいリズムよく弾むボールはヨーロッパの列強国が海外進出を企て、メキシコや南アメリカ産の生ゴムをヨーロッパに紹介した16世紀前半にいちおうの達成をみます。—（中略）—。もう一つ安定したフライトで長く空中に漂うボールという長い間の願いは、ボールに羽を取りつけるというシャトルの発明によってある程度の達成をみます。ゴムボールに比べてシャトルのほうがずいぶん時期的には早く、ヨーロッパでは14世紀からといわれています。」そして、結論として「シャトルとはボールの改良—すべての球形にわたるといっても過言ではない—を目指すなかで生まれた一種のタイプです。形では従来の丸いというボールのイメージを逸脱していますが、成り立ちをみる限りではボールそのものです。」とまとめている。

中学校指導書保健体育編（文部省, 1989c）及び高等学校学習指導要領解説保健体育編（文部省, 1989d）では、「球技」を「ボールなどを媒介として集団的技能、個人的技能を発揮し、集団対集団あるいは個人対個人で攻防を展開し、得点を取り合って勝敗を競うことをねらいとする運動である。」と定義している。

2. 1958 年以前の「ボール運動（遊戯、ボール遊びを含む）」及び「球技」領域の内容

表 1 学校体育指導要綱と学習指導要領におけるボール運動及び球技領域の内容
(1947 年～1956 年)

(学 校 体 育 指 導 要 綱)	小学校低学年(約7年～9年)の遊戯の球技に「フットベースボール、ドッジボール及び対列フットボール」が適当な教材として、あげられている。また、高学年(約10年～12年)では低学年の種目に加えて、「ポートボール、ソフトボール、ワンアウトボール及びフットボール」があげられている。中学校(約13年～15年)ではスポーツの球技に「しゅう球型」と「庭球型」があり、女子の前者は「スピードボール」後者が「バレーボール」と「テニス」となっている。一方、男子の前者は「サッカー、スピードボール、タッチフットボール、ラグビー」後者が「バレーボールとテニス」になっている。高等学校(仮称)(約16～18年)でも、中学校と同様の2型と同種目があげられている。さらに大学(仮称)(約19年～22年)では、「野球型」として女子がソフトボール、男子がソフトボールとベースボール、「ろう球型」では女子、男子共にバスケットボールとハンドボールをあげている。「しゅう球型」では女子がスピードボールのみに対して、男子はサッカー、スピードボール、タッチフットボール及びラグビーとなっている。「庭球型」では男女とも共通なのがバレーボールとテニスで、さらに女子にはピンポン(卓球のこと)が加えてある。したがって、この要綱ではバドミントンに関わる記述は示されていない。
年(育 試編 案小 9習 校指 4導 9要 綱)	第2章に教材の解説とその指導があり、第9節～11節に学年ごとの教材例が示されている。第1、2学年の「ボール遊び」には追いかけて球入れ、手渡し球送り、球受け、自由ドッジボール、ティーチャーボールを含む12種目がある。第3、4学年では方形ドッジボール、フットベースボール、ロングベースボール、コナーボール、フィールドボールを含む12種目がある。さらに第5学年、6学年ではソフトボール、ポートボール、バスケットボール、バレーボール、フリーテニスを含む15種目が取り上げられているが、バドミントンに関わる記述は見られない。
(領 1学 9校 5保 1健 年育 1等 試高 4学 校科 案学 校校 育校 習校 指校 導校 要校)	第3章強調すべき目標と教材で、中心教材と選択教材に区分している。中心教材は、「教材評価において総合的価値の高いもので、事情の許す限り各学校共通に採用されることが望ましい。どちらかといえば、発達上の価値の高いものが大部分である。」また、選択教材は個人の特殊な要求に応ずるものや、特殊の施設に応ずるもの、あるいはまた教材評価における総合的価値がある程度低くとも、余暇活動としてよいものが大部分である。」としている。中学校の中心教材のうち、「ボール運動」(球技)をみると、男子ではバスケットボール、サッカー、バレーボール、スピードボールまたはハンドボール、トライボール、ソフトボールまたは軟式野球、女子ではバレーボール、女子バスケットボール、追羽根またはバドミントンであり、同様の選択教材としては男子がテニス、ピンポン、バドミントン、女子がピンポン、テニスとなっている。一方、高等学校の中心教材のうち、「ボール運動」(球技)をみると、男子ではバスケットボール、バレーボール、スピードボール、ラグビー、ソフトボールまたは軟式野球、女子では中学校と同様な種目があげられている。同様の選択教材では男子がテニス、ピンポン、バドミントン、女子ではテニス、ピンポンが取り上げられている。次に、指導計画(指導内容)のバドミントンに関わる記述は中学及び高等学校の女子のみにあり、「バドミントン一般(歴史や練習法など)」「ラケットの握り方」「ストローク」「サーブ」「スマッシング」「ボレーとレシーブ」「攻防法」及び「ゲーム」となっている。指導内容はほとんど同様であるが、高等学校のほうにやや発展系が示されている項目があった。
案育小 科校 編校 (学 習 指 導 要 綱 試 案)	附録(Ⅵ)「ボール遊び、ボール運動」の運動の方法に低学年(第1・2学年)としてドッジボールと球入れがあり、中学年(第3・4学年)としてはドッジボールとハンドベースボール及びフットベースボールがあり、高学年(第5学年・6学年)としてはポートボール、ネットボール、ソフトボール及び簡易サッカーが取り上げられている。
(保 1高 1等 9体 5学 5育 6科 学 年編 習 改指 訂導 版要 領)	第3章の運動の内容の中に「運動の分類」がある。その「団体的種目」にはバレーボール、バスケットボール、ハンドボール、サッカー(男)、ラグビー(男)がある。また、「レクリエーション的種目」としてテニス(*軟式と思われる)・卓球・バドミントン・ソフトボールまたは軟式野球を含む9種目が取り上げられている。さらに、技能的内容の「レクリエーション的種目」には、水泳、スキー、軟式テニス、卓球、バドミントン、ソフトボール、ダンスが取り上げられている。そのうち、バドミントンに関してみると「基本:グリップ、ストローク、サービス、シャトルの飛ばし方、レシーブ」と「応用:攻防法、ダブルスのコンビネーション」及び「ゲーム:シングルス、ダブルス、審判とゲームの運営」となっている。なお、「内容の説明および取扱上の留意点」をみたところ「バドミントンの用具のない場合は、追羽根をバドミントンのようにゲーム化して行く。」となっていて、大変興味深い。

表 1 は、1958 年以前の学校体育指導要綱(1947 年)と学習指導要領(1953 年～1956 年)における「ボール運動(遊戯、ボール遊びを含む)」及び「球技」領域の内容をまとめたものである。この時代、小学校は 2 回の学習指導要領(試案)が出されたがバドミントンに関わる記述は示されていない。中学校並びに高等学校については、学習指導要領(1951 年, 1956 年)でいずれもバドミントンに関わる記述が示されていた。

なお、1951 年試案の付表には各教材の評価がある。これらに関して、当時、その作成に関わった宇土(1993)は次のように述べている。「この教材評価の原典は、よく知られているように、当時、南カルフォルニア大学での研究を進めていたラポートの体育カリキュラムで、その方式をそのままとりいれることになる。」—中略—「ところが、である。残念なことに、その教材評価にかけたエネルギーは、その評点をどんな指導法で活用できるかというところには及ばないのであった。」つまり、指導と評価が一体でなかったということだろう。当時、占領軍との関わりを否定できない“ある事情”によって、この指導要領保健体育科体育編が予定よりもおよそ 2 年遅れて示されたらしい。

最後に、この節のまとめとして、草創期の日本バドミントン界の発展や普及に尽力した伊藤（1971）の論文の一部を紹介しておく。ここでは、昭和20年代に中学校の選択教材としてバドミントンが取り上げられたにもかかわらず、数年後には、教材として不適切だということになり、削除された経緯について述べている。その理由を要約すると、次のようになる。「学校の体育教材として紹介されたバドミントンは、当時流行したレクリエーションや軽スポーツの1つとして安売りされてしまった。ルールブックと首っただけでバドミントンの勉強をさせられた、所謂にわか仕込みの指導者が講習会をし、その受講者が各県に腹講した。風の吹く校庭に石灰でコートラインを引き、はためくネットが張られ、まずはルールの解説が行われ、次に実技指導が行われた。だが、日程の関係から初歩的なストロークが十分に打てない状態で試合形式の指導を受けることとなる。その結果、ラケット及びシャトルの損傷が激しくて費用がかかりすぎ、教材としては不適切だということになった。」その上で、伊藤はその伝達法や指導法だけに責任を押し付けず、つまるところはバドミントンが中学校の体育の中に育つ環境が熟していなかったことが要因ではないかと指摘している。

3. 1958年以降の「ボール運動（ゲームを含む）」、「球技」及び「集団スポーツ」領域の内容

表2 小学校学習指導要領体育科（1958～2008年）の内容の概要

年（指小） 1導学 9要校 5領学 8習	体育科は「徒手体操、器械運動、陸上運動、ボール運動、リズム運動、その他の運動」の6領域となっている。水泳が「その他の運動」の領域にある。「ボール運動」領域にバドミントンに関する記述はない。ただし、「指導計画作成ならびに学習指導の方法」2で、「第2に示す内容は、特に示す場合を除き、いずれの学校においても取扱うことを必要とするものであるが、地域や学校の実態を考慮し、特に必要と認められる場合は、これに示していない運動種目を加えて指導してもさしつかえない。しかし、いたずらに指導する種目を多くしたり、程度の高い事項を取り扱ったりして、示された目標や内容の趣旨を逸脱したり、負担過重にならないよう慎重に配慮しなければならない。」と示されている。
年（指小） 1導学 9要校 6領学 8習	体育科は、「体操、器械運動、陸上運動、水泳、ボール運動、ダンス、及び（保健）」の6（7）領域である。保健は5年生と6年生のみである。バドミントンに関する記述は見られない。ただし、5・6年生の「内容の取扱い」において、「内容のEの（1）のイ、ウについては、運動場が狭くじゅうぶんな指導ができない場合は、その広さに応じて内容を縮減し、または他のボール運動種目に代えることができる。」とある。この「他のボール運動種目」に、バドミントンが該当するかは微妙である。
7（領小） 1習学 9導校 7要学	体育科は、低学年が「基本の運動、ゲーム」、3年生が「基本の運動、ゲーム、表現運動」、4年生が「基本の運動、ゲーム、器械運動、表現運動」、高学年が「体操、器械運動、陸上運動、水泳、ボール運動、表現運動、及び（保健）」領域である。バドミントンに関する記述は見られない。
年（指小） 1導学 9要校 8領学 9習	体育科は、低学年が「基本の運動、ゲーム」、中学年が「基本の運動、ゲーム、器械運動、水泳、表現運動」、高学年が「体操、器械運動、陸上運動、水泳、ボール運動、表現運動、及び（保健）」領域である。バドミントンに関する記述は見られない。
領小 （1校） 9学 9習 8指 8導 （要）	体育科は、低学年が「基本の運動、ゲーム」、中学年が「基本の運動、ゲーム、器械運動、水泳、表現運動、（保健）」、高学年が「体づくり運動、器械運動、陸上運動、水泳、ボール運動、表現運動、及び（保健）」領域である。今回から中学年の「ゲーム」領域はバスケットボール型、サッカー型及びベースボール型となった。ただし、「3 内容の取扱い」の（2）において、「内容の「Bゲーム」の（1）」については、地域や学校の実態に応じてバレーボール型ゲームなどその他の運動を加えて指導することができる。」すなわち、バスケットボール型ゲーム以外に、バレーボール型やその他のゲームができるため、バドミントンに関するゲームも可能と考えられる。一方、高学年はア・バスケットボール、イ・サッカー、ウ・ソフトボール又はソフトバレーボールが示された。「3 内容の取扱い」の（3）では「内容の「Eボール運動」の（1）」については、地域や学校の実態によってはウは取り扱わないことができることとし、ハンドボールなどその他のボール運動を加えて指導することができる。」と記されているため、バドミントンに関する運動を加えることが可能と考えられるものの、前述したように、バドミントンが「ボール運動」といえるかどうかは微妙である。
年（指小） 2導学 0要校 0領学 3習	前回版と同様な記述になっている。
領小 （2校） 0学 0学 8習 8指 年導 （要）	体育科は、低学年が体づくり運動、器械・器具を使つての運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ゲーム、表現リズム遊び、中学年が体づくり運動、器械運動、走・跳の運動、浮く、泳ぐ運動、ゲーム、表現運動および（保健）、高学年が体づくり運動、器械運動、陸上運動、水泳、ボール運動、表現運動、及び（保健）領域である。今回から中学年の「ゲーム」及び「ボール運動」領域はゴール型、ネット型及びベースボール型となった。高学年の「3 内容の取扱い」の（3）において、内容の「Eボール運動」の（1）については「アはバスケットボール及びサッカーを、イはソフトバレーボールを、ウはソフトボールを主として取り扱うものとするが、これらに替えてそれぞれの型に応じたハンドボールなどのその他のボール運動を指導することもできるものとする。なお、学校の実態に応じてウは取り扱わないことができる。」と示されている。ここで注目すべきは、これらに替えてそれぞれの型に応じたハンドボールなどのその他のボール運動を指導することもできるものとする。とある点である。

まず、表2に1958年から2008年までに告示された小学校学習指導要領体育科の領域と内容をまとめた。次に、1958年から2009年までに告示された中学校学習指導要領並びに高等学校学習指導要領における保健体育科の領域と内容についてまとめた。以下はその概要である。

(1) 中学校学習指導要領 (1958 年)

保健体育の1年～3年の「球技」領域には、バドミントンに関わる記述はない。ただし、「第3 指導計画作成および学習指導の方針」3に次のような記述がある。「第2に示す体育の分野の内容は、特に示す場合を除き、いずれの学校においても取扱うことを必要とするものであるが、地域や学校の実態を考慮し、特に必要と認められる場合は、これに示していない運動種目を加えて指導してもさしつかえない。しかし、いたずらに指導する種目を多くしたり、程度の高い項目を取扱ったりして、示された目標や内容の趣旨を逸脱したり、負担過重にならないよう慎重に配慮しなければならない。」としている。

(2) 高等学校学習指導要領 (1960 年)

保健体育をみると、「球技」領域に男女ともテニス（または卓球、バドミントン、ソフトボール）（以下、テニスまたは・・・と略す。）が示されている。全日制の課程の男子は（バスケットボール、ハンドボール）（バレーボール、テニスまたは・・・）（サッカー、ラグビー）の3群からそれぞれ1種目以上選択する。また女子は（バスケットボール、ハンドボール）（バレーボール、テニスまたは・・・）の2群からそれぞれ1種目以上選択する。また、各種目の技能や規則を習得して、正規の規則に準じたゲームと審判ができるようにする。とあるが、バドミントンについては、個人技能としての「ストローク」「サーブ」「レシーブ」とゲームでは「シングルス」「ダブルス」「作戦、規則および審判」が取り上げられている。

さらに、[取り扱い上の留意点]としての一般事項に「テニス、卓球、バドミントンなどは、できるだけ多数の者が活用できるようにコートや用具の使用および指導のしかたをくふうする。また、男女混合のチームをつくってゲームを行なうなどの方法も考慮するとよい。」とある。これは、同群のバレーボールに比して、1人当たりの運動量が劣らないように工夫することが求められているものと考えられる。もう1つは、指導計画作成および指導上の留意事項として、(3)に「各領域の内容については、示された事項に基づき、地域や学校および生徒の実態などを考慮して選択するとともに、これに示していない運動種目（たとえばスキー、スケートなど）を加えて指導してもよい。この場合においても、示された目標や内容の趣旨を逸脱しないようにするとともに、各領域の授業時数の割合をあまり変更しない程度に各領域の授業時数をさいてこれに充てる。」ことと、(4)には「各領域の運動種目の選択にあたっては、学年の発達段階を考え、低学年では身体の発達を促進させるような種目、高学年では将来の生活に取り入れやすい種目に重点をおくようにする。」ことがあげられている。これらは個々の発育発達を考慮して、生涯スポーツにつながるような種目選択になることを期待しているものと考えられる。

（３）中学校学習指導要領（1969 年）

保健体育の「F 球技」領域には、バスケットボール、ハンドボール、バレーボール及びサッカー（男子）が示されているものの、バドミントンに関わる記述はない。ただし、「内容の取扱い」の（７）ウに「第３学年においては、示された球技種目に代えて、ソフトボール、テニス、卓球、バドミントンを指導することができること。」と中学校では学校体育指導要綱以来、久しぶりに記された。

（４）高等学校学習指導要領（1970 年）

保健体育をみると、「F 球技」領域から前回記されていた、テニス、卓球、バドミントン、ソフトボールが削除された。ただし、「内容の取扱い」（１）において、男女いずれの場合にも内容のE（格技：男子）、F（球技）及びG（ダンス：女子）のうちからいずれか適切な種目を自由に選択して取り扱うものとする（以下「第２選択」という。）。となっている。「なお、その第２選択の場合、学校や地域の実態を考慮し、すもう、弓道、レスリング、なぎなた、テニス、卓球、バドミントン、ソフトボール、スキー、スケートなどからも選択することができる。」との付記がある。つまり、バドミントンが盛んな学校や地域では選択する可能性が高いと考えられる。ただし、選択といっても、主導権は教師に委ねられているかもしれない。

（５）中学校学習指導要領（1977 年）

第２章第７節保健体育の体育分野は「体操、個人的スポーツ、集団的スポーツ、格技、ダンス、体育に関する知識」になっている。「集団的スポーツ」は、バスケットボール、バレーボール及びサッカーが示されているものの、バドミントンに関わる記述はない。ただし、「内容の取扱い」の（９）に「学校の実態及び生徒の興味や関心に応じて、テニス、卓球、バドミントン又はソフトボールのうち一を加えて指導することができる。」と記されている。

（６）高等学校学習指導要領（1978 年）

第２章第５節保健体育の「体育」は、「体操、個人的スポーツ、集団的スポーツ、格技、ダンス、体育理論」となっている。バドミントンは示されていないものの、「３ 内容の取扱い」カには、「学校や地域の実態を考慮し、各学年においてソフトボール、相撲、弓道、レスリング、なぎなた、テニス、卓球、バドミントン、スキー及びスケートの中からも選択して指導できること。」と記されている。

（７）中学校学習指導要領（1989 年）

第２章第７節保健体育の体育分野は「体操、器械運動、陸上運動、水泳、球技、武道、ダンス、体育に関する知識」になった。この中で、「E 球技」はバスケットボール、サッカー、バレーボール、テニス、卓球又はバドミントン、ソフトボールが示されており、「３ 内容の取り扱い」（１）のアではEは１学年のすべての生徒に履修させること。イではEは２学年においては２種目を選択して履修できるようにすること。ウではEは３学年においても２種目を選択して履修できるようにすること。オではEの運動については、これらのう

ちから2種目を選択して履修できるようにすること。また、(3)には「内容のAからGまでの領域及び運動の選択並びにその指導に当たっては、地域や学校の実態及び生徒の特性等を考慮するものとする。」と記されている。そのため、バドミントンは選択履修の可能性が高まったと考えられる。

(8) 高等学校学習指導要領(1989年)

第2章第6節保健体育の「体育」は、「体操、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンス、体育理論」となっている。「E 球技」のクにバドミントンが示されている。今回、単独で記されている。また、「3 内容の取扱い」オには、「Eの(1)の運動については、これらのうちから2を選択して履修できるようにすること。」となっている。すなわち、バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビー、バレーボール、テニス、卓球、バドミントン及びソフトボールの中で2種目を選択履修できることになった。さらに、(3)では「内容のBからGまでの領域及び運動については、生徒が特性等に応じて、選択して履修できるようにするものとする。その際、内容のBからFまでの領域及び運動については、審判の仕方についても指導するものとする。」と記されている。

(9) 中学校学習指導要領(1998年)

第2章第7節保健体育の体育分野は体づくり運動、器械運動、陸上運動、水泳、球技、武道、ダンス、体育に関する知識になった。この中で、「E 球技」はア バスケットボール又はハンドボール、イ サッカー、ウ バレーボール、エ テニス、卓球又はバドミントン、オ ソフトボールが示されている。上記のアにハンドボールが加わった。「3 内容の取扱い」(1)のアでは、球技は1学年のすべての生徒に履修させること。イでは球技は2学年及び3学年においては2種目を選択して履修できるようにすること。また、(2)のオで球技の運動については「これらのうちから二を選択して履修できるようにすること。なお、地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができること。」となっている。さらに、(3)で「内容の「A体づくり運動」から「Gダンス」までの領域及び運動の選択並びにその指導に当たっては、地域や学校の実態及び生徒の特性等を考慮するものとする。その際、指導に当たっては、内容の「H体育に関する知識」との関連を図るとともに、内容の「B器械運動」から「Gダンス」までの領域については、それぞれの運動の特性に触れるために必要な体力を生徒自ら高めるように留意するものとする。」と記されている。

(10) 高等学校学習指導要領(1999年)

第2章第6節保健体育の「体育」は、体づくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンス、体育理論となっている。「E 球技」のクに前回同様、バドミントンが示されている。また、「3 内容の取扱い」オには、「Eの(1)の運動については、これらのうちから2つを選択して履修できるようにすること。なお、地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができること。」となっている。また、(3)では「内容のBからGまでの領域及び運動については、生徒が特性等に応じて、選択して履修でき

るようにするものとする。指導に当たっては、内容のBからGまでの領域については、それぞれの運動の特性に触れるために必要な体力を生徒自ら高めるように留意するものとする。また、内容のBからFまでの領域及び運動については、審判の仕方についても指導するものとする。」と記されている。

(11) 中学校学習指導要領（2003 年）及び高等学校学習指導要領（2007 年）

いずれも前回版と同様な記述であった。

(12) 中学校学習指導要領（2008 年）

第2章第7節保健体育の体育分野は、第1学年及び第2学年と第3学年に分けた。領域は体づくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンス、体育理論になっている。この中で、「E 球技」はア ゴール型、イ ネット型、ウ ベースボール型と表記され、種目は[内容の取扱い]の(2)のオで次のように示されている。「第1学年及び第2学年においては、アからウまでをすべての生徒に履修させること。第3学年においては、アからウまでの中から二を選択して履修できるようにすること。また、アについては、バスケットボール、ハンドボール、サッカーの中から、イについては、バレーボール、卓球、テニス、バドミントンの中から、ウについては、ソフトボールを適宜取り上げることとし、地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができること。なお、ウの実施に当たり、十分な広さの運動場の確保が難しい場合は指導方法を工夫して行うこと。」となっている。

また、(3)では、「内容の「A 体づくり運動」から「G ダンス」までの領域及び運動の選択並びにその指導に当たっては、地域や学校の実態及び生徒の特性等を考慮するものとする。その際、指導に当たっては、内容の「B 器械運動」から「G ダンス」までの領域については、それぞれの運動の特性に触れるために必要な体力を生徒自ら高めるように留意するものとする。」とも示されている。前述のように今回は、ゴール型、ネット型、ベースボール型と示されている。「E 球技」(1)のアでは「次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、作戦に応じた技能で仲間と連携しゲームが展開できるようにする。」そして、イでは「ネット型では、役割に応じたボール操作や安定した用具の操作と連携した動きによって空いた場所をめぐる攻防を展開すること。」と記されている。また、アのゴール型とウのベースボール型を含め、＜ボール操作＞という語句が見られる。ここに、＜ボール運動＞を想定していることが読み取れる。なお、今回の学習指導要領からは格技及びダンスの男女必修化が特筆される。

(13) 高等学校学習指導要領（2009 年）

第2章第6節保健体育の「体育」は、体づくり運動、器械運動、陸上競技、水泳、球技、武道、ダンス、体育理論となっている。「E 球技」には前回のような種目名はなく、中学と同様に「ゴール型」「ネット型」及び「ベースボール型」となっている。具体的には、「3 内容の取扱い」オには、「Eの(1)の運動については、入学年次においては、アからウまでの中から二つを、その次の年次以降においては、アからウまでの中から一つを選択して履

修できるようにすること。また、アについては、バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビーの中から、イについては、バレーボール、卓球、テニス、バドミントンの中から、ウについては、ソフトボールを適宜取り上げることとし、地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができること。」となっている。したがって、イすなわち「ネット型」としてバドミントンが示されているのは、前回同様である。なお中学校と同様に、今回の学習指導要領からは武道及びダンスの男女必修化が特筆される。

4. 総合考察

表3 学習指導要領におけるバドミントンに関わる記述の有無

告示等の年	学習指導要領等の名称	領域等	バドミントンに関わる記述の有無
1958(昭和33年)	小学校学習指導要領 体育科	ボール運動	無し 特記事項
1958(昭和33年)	中学校学習指導要領 保健体育科	球技	無し 特記事項
1960(昭和35年)	高等学校学習指導要領 保健体育科	球技	テニス(または卓球、バドミントン、ソフトボール)
1968(昭和43年)	小学校学習指導要領 体育科	ボール運動	無し 特記事項
1969(昭和44年)	中学校学習指導要領 保健体育科	球技	第3学年 示された種目に代えて(ソフトボール、テニス、卓球、バドミントン)指導することができる
1970(昭和45年)	高等学校学習指導要領 保健体育科	球技	第2選択 学校や地域の実態を考慮して、相撲、弓道、レスリング、なぎなた、テニス、卓球、バドミントン、ソフトボール、スキー、スケートなどから選択することができる
1977(昭和52年)	小学校学習指導要領 体育科	ゲーム、ボール運動	無し
1977(昭和52年)	中学校学習指導要領 保健体育科	集団的スポーツ	学校の実態及び生徒の興味や関心に応じて、テニス、卓球、バドミントンはソフトボールのうち1を加えて指導することができる
1978(昭和53年)	高等学校学習指導要領 保健体育科	集団的スポーツ	学校や地域の実態を考慮して、各学年においてソフトボール、相撲、弓道、レスリング、なぎなた、テニス、卓球、バドミントン、スキー及びスケートの中から選択して指導できる
1989(平成元年)	小学校学習指導要領 体育科	ゲーム、ボール運動	無し
1989(平成元年)	中学校学習指導要領 保健体育科	球技	バスケットボール又はハンドボール、サッカー、バレーボール、テニス、卓球又はバドミントン、ソフトボールの中から、学年によって1～2を選択履修できる。地域や学校の実態及び生徒の特性等を考慮する
1989(平成元年)	高等学校学習指導要領 保健体育科	球技	バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビー、バレーボール、テニス、卓球、バドミントン、ソフトボールの中から、2を選択履修する。生徒が特性等に応じて選択できるようにする
1996(平成10年)	小学校学習指導要領 体育科	ゲーム、ボール運動	地域や学校の実態に応じてバレーボール型ゲームなどその他の運動を加えて指導することができる。地域や学校の実態によっては、ハンドボールなどその他のボール運動を加えて指導することができる
1996(平成10年)	中学校学習指導要領 保健体育科	球技	バスケットボール又はハンドボール、サッカー、バレーボール、テニス、卓球又はバドミントン、ソフトボールのうちから2を選択履修できる。地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができる。その他特記事項あり
1999(平成11年)	高等学校学習指導要領 保健体育科		バスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビー、バレーボール、テニス、卓球、バドミントン、ソフトボールの中から、2を選択履修する。学校や地域の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができる。その他特記事項あり
2003(平成15年)	小学校学習指導要領 体育科 一部改正版	ゲーム、ボール運動	平成10年版と同じ
2003(平成15年)	中学校学習指導要領 保健体育科 一部改正版	球技	平成10年版と同じ
2007(平成19年)	高等学校学習指導要領 保健体育科 一部改正版	球技	平成11年版と同じ
2008(平成20年)	小学校学習指導要領 体育科	ゲーム、ボール運動	ボール運動の(1)については、アはバスケットボール及びサッカーを、イはソフトバレーボールを、ウはソフトボールを主として取り扱うものとするが、これらに替えてそれぞれの型に似たハンドボールなどのその他のボール運動を指導することもできる。
2008(平成20年)	中学校学習指導要領 保健体育科 2010年一部改正あり	球技	第1学年及び2学年はアからウまですべての生徒に履修させる。3学年はアからウまでの中から2を選択履修。アはバスケットボール、ハンドボール、サッカーの中から、イはバレーボール、卓球、テニス、バドミントンの中から、ウはソフトボールを選択取り上げることとして、地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができる。その他特記事項あり
2009(平成21年)	高等学校学習指導要領 保健体育科	球技	球技の(1)の運動については、入学年度においてはアからウまでの中から2つ、その次の年度以降はアからウまでの中から1つを選択履修。アはバスケットボール、ハンドボール、サッカー、ラグビーの中から、イはバレーボール、卓球、テニス、バドミントンの中から、ウはソフトボールを選択取り上げることとし、地域や学校の実態に応じて、その他の運動についても履修させることができる。

注：学習指導要領データベース、国立教育政策研究所(2014)を基に岸がまとめた。

(1) 学習指導要領(学校体育指導要綱を含む)の「ボール運動(ボール遊びを含む)」と「球技」領域の内容の変遷(主に、バドミントンの扱いについて)のまとめ

表3は学習指導要領におけるバドミントンに関わる記述の有無をまとめたものである。これらのことから明らかなように、小学校学習指導要領体育科では、「バドミントン」及び「バドミントンに関わる種目や運動遊び」は一度も示されていない。また、解説体育編に

も例示されたことはない。中学校及び高等学校については、1951年の中学校 高等学校学習指導要領保健体育科体育編（試案）で、女子の中心教材（男子は選択教材）としてバドミントンが初登場した。次の1956年の高等学校学習指導要領では、「レクリエーション種目」の1つとしてバドミントンが取り上げられている。また、1960年の高等学校ではテニス（または卓球、バドミントン、ソフトボール）と示された。それ以降は、中学校及び高等学校の「球技」領域で、示された種目の代替（1969年、中学校）であったり、学校や地域の実態を考慮して加えることが出来るようになり（1977年・中学校、1978年・高等学校）、その改訂指導要領（1989年・中学校、高等学校）でも「球技」種目の1つに加えられている。

現行学習指導要領では中学校（文部科学省, 2008c）と高等学校（文部科学省, 2009a）の「E 球技」で、選択履修が可能なネット型（スポーツ運動種目）として示されている。小学校との学習の系統性について中学校学習指導要領解説保健体育編（文部科学省, 2008d）をみると、「ボールや用具の操作」と「ボールを持たない時の動き」が例示されている。その内容は、ネット型に共通する用具の操作及び動きと述べられているものの、一部を除けばバレーボール（ソフトバレーボール）に関するものである。高等学校学習指導要領解説保健体育編（文部科学省, 2009b）についても、ほとんど同様な記述となっている。

さらに現行の小学校学習指導要領からは、発達段階を踏まえた指導内容の明確化・体系化を重視したといわれている（文部科学省, 2008b）。球技の内容の体系化については、実技指導資料（文部科学省, 2010）が、そのことを詳細に著しており大変参考になる。しかしながら、小学校の「ゲーム」及び「ボール運動」領域にはラケットを操作する運動種目の例示がなく、中学校・高等学校では「球技」領域にラケットを操作するバドミントン、卓球、テニスが示されている。つまり、一貫指導の体系を考慮した内容とは思えない。したがって、小学校ではバドミントンに関わる導入段階と準備段階並びに初期段階の教材が必要だと考えられる。

（2）小学校体育科でのバドミントンに関わる教材の意義

ここでは、小学校体育科の「器械・器具を使つての運動遊び」と「走・跳の運動遊び」や「ゲーム」及び「ボール運動」領域に、バドミントンに関わる教材を導入する理由について4つの観点から述べていく。

①**法的根拠**：現行学習指導要領体育科高学年（5．6年） 3 内容の取扱い（3）内容の「E ボール運動」の（1）については、アはバスケットボール及びサッカーを、イはソフトバレーボールを、ウはソフトボールを主として取り扱うものとするが、これらに替えてそれぞれの型に応じたハンドボールなどのその他のボール運動を指導することもできるものとする。（波線部分は筆者が加筆）とあることから、筆者はバドミントンに関わる学習プログラム（ドリル）の開発と教材化を考案中である。

②**教材の価値**：幼児・児童期には基礎的運動スキル（「A. 移動運動 B. 操作運動 C. 姿勢制御運動」）の習得が必要だといわれている（D. L. Gallahue, 1999）。筆者が提案するバドミン

トンに関わる初歩的段階プログラムは、A. B. C のすべてに当てはまり、主に歩く・跳ぶ・投げる・打つ・ボレーする及び体軸の曲げ伸ばしやひねりといったスキル要素を含む運動で構成されている。

③**用具の進歩**：前述の昭和 20 年代に比べ、以下のように用具の進歩・開発が著しいため、比較的軽量で丈夫、しかも安価な用具が購入できる。ただし、バドミントン用支柱を用いる場合には体育館に専用の穴（床金具）か、移動用支柱セット（10 万円くらい）が必要になる。

例 1 木製ラケット →カーボン製で軽量化した。

例 2 シャトルは鶏（コック）の羽根を用いていたが、現在は水鳥を使用して製造している。しかし、高価な水鳥（ガチョウ）よりも比較的安価な水鳥（ダチョウやアヒル）のほうが壊れやすいと考えられる。また、鳥インフルエンザの影響で高騰したこともあり、今後はナイロン製（耐久性あり、強打の際は壊れやすい）やコンポジット（耐久性あり、現在は公認球ではない）にシェアが広がる可能性がある。

例 3 ストリング（ガット）は初期のころは羊の腸などで作っていたため高価 →ナイロンなどの化学繊維等で耐久性があり、比較的安価なものになっている。

④**技術習得**：バドミントンは、保健体育科教員免許の必修科目になっていない。そのため、中学・高等学校の保健体育科教員はもちろんのこと、小学校教員は専門的にバドミントンを学修していない可能性が高い。しかしながら、筆者の提案する学習プログラムは専門的なバドミントン経験がなくても十分指導が可能だと考えられる。

（3）小学校学習指導要領体育科にバドミントンが導入されるための要件

小学校学習指導要領（文部省, 1958）から、特別教育活動（1968 版以降は特別活動）にクラブ活動が示され、4 年生以上の同好の児童が集まって、所謂「必修クラブ」を週 1 時間楽しんでいる。そこでは、児童の自発的な活動と教師の適切な指導や支援が求められている。体育館での施設環境や用具が整い、指導できる教師がいれば「バドミントンクラブ」がある小学校も多いものと推察される。しかしながら前述のように、小学校学習指導要領体育科ではバドミントンが取り上げられたことがないので、体育の授業ではほとんど行われていないと考えられる。その理由としては、(1) 学習指導要領（解説を含む）に示されていない、(2) 授業時数の問題、(3) 施設用具の不備、(4) 教師の問題（バドミントンの経験がない、指導の難しさなど）、(5) 大衆人気度が低い、などが考えられる。一方、中学校及び高等学校学習指導要領保健体育科では 1951 年の試案に初出して以来、その後の取扱いについては紆余曲折があったものの、現行では「球技」領域にバドミントンが示されている。

オリンピックの正式種目への採用・不採用は、各スポーツ競技団体にとっては死活問題である。そのため、I O C（国際オリンピック委員会）の理事会で 2020 年東京五輪の「コア競技」（猪谷, 2013）から除外候補に挙がったレスリングや野球・ソフトボールなどの関連団体が、メダリストらを前面に出して署名活動等を行い、レスリングが復活を果たした。それらと同じように、学習指導要領への採用・不採用も各競技団体（個人を含む）と文部

科学省（役人を含む）との公式・非公式の折衝によって決まる可能性も否めない（本橋ら, 1998）。それゆえ、小学校体育科でバドミントンに関わる運動（遊び）を採用してもらうと共に、今後も中学・高等学校保健体育科の「球技」領域でバドミントンが示され続けるには、競技団体関係者並びに大学教授等がバドミントンの魅力や教材価値等を文部科学省（役人）に根回しすることや国民に発信する活動を継続していくことが得策であろう。

また、2014年5月にインドのニューデリーで開催されたバドミントンのメジャー大会（男子トマス杯と女子ユース杯；共に団体戦のみ）において、日本チームが男子は初優勝に輝き、女子についても準優勝を勝ち取ったにもかかわらず、メディアでの紹介がほとんどなかった。したがって、メディアへのアピールを積極的におこなうことも必要だと考えられる。

最後に、わが国の競技スポーツは学校体育（授業や運動部活動）を中心に発展してきた経緯がある。とりわけ体育授業では、学習したスポーツを生涯にわたって親しむようにすることが大きな目標になっている。つまり、授業で学習して「楽しかった」スポーツへの興味・関心は比較的高く、未習のスポーツは低くなることが予想される。そのため、小学校から高等学校までの体育授業に参考となるような教材の開発や技術の系統性を考慮に入れたバドミントンの指導体系を構築することが喫緊の課題だと考えられる。

Ⅲ 小学校体育科におけるバドミントンに関わる教材の開発（試案）

則元（2002）は教材づくりの条件として①簡易性、②安全性、③固有の技術の特質、④ルール変更などが一般的に挙げられると述べている。また、体育授業では「正式」スポーツの技能習熟だけをめざすものではないことはあきらかであり、スポーツの文化的価値を対象に教育的価値の視点から教科内容を構成して教材づくりを行うことが重要だと述べ、「教材から見た教科内容」と「教科内容から見た教材」の2分類から教材づくりを示している。佐藤（2006）は、小学校学習指導要領体育科の「ボール運動」領域に対人ネット型の個人種目（「テニス、卓球又はバドミントン」等）が示されていないことに疑問を持ち、対人ネット型の個人種目の可能性について検討した。その結果、中学・高等学校の対人ネット型の個人種目を実践する時の問題点として、（1）場や用具といった学校施設、（2）ラケット操作の難しさ、（3）男子生徒の攻守混合型の球技への興味・関心の高さを挙げている。そのうえで、対人ネット型の個人種目が持つ機能的特性に目を向け、その必要性を論じていくことが必要だと報告している。また、対人ネット型の個人種目の価値については、集団的な球技にない特性や面白さ（例えば、接触プレーがなく安全、体格差や性差を考えずにできる、個人での駆け引きが多い。）を持っていると述べている。さらに、小学校での実践例としては、「卓球」「バドミントン」「プレルボール」「ショートテニス」及び特別活動におけるクラブ活動を紹介している。考察においては、運動スキルの発達に関してデビ

ッド・F・ガラヒューを、そしてM. チクセントミハイのフローモデルに関する学説を援用し、卓球やバドミントンを小学校の体育カリキュラムに入れることは十分可能だと主張している。

長年、筆者もこれらのことについて考えてきたが、この先行研究にたどり着いたのは最近のことである。佐藤（2006）の実践は6年生を対象としたものであり、具体的な指導内容は示されていない。そのため筆者は、小学校低学年（1・2年生）と中学年（3・4年生）及び高学年（5・6年生）のそれぞれについて学習プログラム（ドリル）を試作した。

ところで、筆者は先の論稿（岸, 2014）において、小学校体育科でのバドミントンに関わる内容を提示した。それは、『学校体育実技指導資料第8集 ゲーム及びボール運動』（文部科学省, 2008, p. 122-123）に加筆したものであった。しかしながら、その後、さらに検討した結果、基礎的運動遊びとゲームに関しての内容を加えることになった。

小学校体育科のバドミントンに関わるドリルの概略（岸ら, 2014）は、図1のように低学年は「調整力を高めるような多様な遊び」（導入段階）、中学年は「ラケットとシャトルを用いた運動遊び」（準備段階）及び高学年は「バドミンントンの初期段階の運動・ゲーム」（初期段階ドリル）になると考えている。

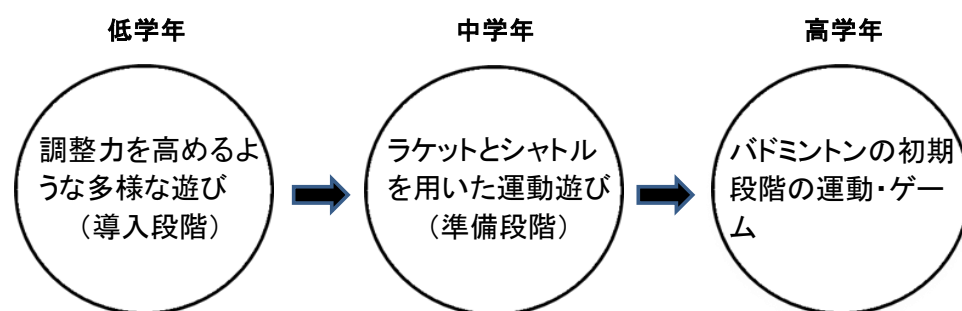


図1 小学校体育科のバドミントンに関わるドリルの概略

次に、その詳細を述べていく。表4は、低・中学年用のバドミントンに関わる導入段階の内容である。なお、表中の丸抜き数字は学習指導の順番を示す（以下同様）。①～④は低学年、⑤～⑧は中学年を想定している。①では、バドミントンラケットとシャトル、テニスラケットとボール及び卓球ラケットとボールを中が見えないような箱に入れておく。そして、バドミントン→テニス→卓球の順に出しながら、この用具を使うスポーツが何かを答えてもらう。②では、①で取り上げたスポーツの競技種目を教える。③では、①で取り上げたスポーツのプレーする場所を教える。④では、テニスからバドミントンと卓球が派生したことを話す。⑤と⑦は、バドミンントンのシャトルとラケットに関わる「お話」である。⑤では構造や種類について解説する。⑦では変遷や種類を紹介する。⑥と⑧は、それ

ぞれの実物を用意したほうが効果的である。

表 4 低・中学年のバドミントンに関わる導入段階の内容

①これを使って行うスポーツは何でしょう？ バドミントンラケット・シャトル、テニスラケット・ボール、 卓球ラケット・ボールを順次、見せて答えてもらう。	⑤バドミントンのシャトルに関わるお話 シャトルの構造、種類 写真やイラストを使ってもよい
②これら（上記3つ）のスポーツは1人対1人で行う試合を シングルス、また、2人対2人で行う試合をダブルスとい います。	⑥実際にシャトルに触ってみましょう。 シャトルには水鳥製、ナイロン製、コンポジット製があり ます。
③バドミントンと卓球は体育館などの家の中で、テニス は家の外のコートと家の中のコートで行うことがあります。	⑦バドミントンのラケットに関わるお話 ラケットの変遷、種類 写真やイラストを使うと効果的
④実はバドミントンと卓球は、テニスからヒントをもらって 考え出されたスポーツなのです。	⑧実際にラケットに触ってみましょう。 長さや重さの違いに気付かせる。 正規ラケット(RR)とジュニア用ラケット(JR)を見せる。

表 5 は、高学年用のバドミントンに関わる導入段階の内容である。①ではオリンピックの歴史について学ぶ。②では、近代スポーツの歴史について学び、③～⑤では羽根つきの形態から近代バドミントンの発生及び日本への伝来について理解させる。また、⑥～⑩はバドミントンの競技特性や用・器具の規格及び現在の世界での競技レベル等について、知ることとなる。

表 5 高学年のバドミントンに関わる導入段階の内容

①オリンピックの歴史について 古代オリンピックは古代ギリシャの4大競技祭典のひとつだった。近代オリンピックはクーベルタンによって提唱され、1896年に第1回が開催された。では、2020年の東京開催は何回目？	⑥バドミントンの魅力はシャトルの飛び方？ バドミントンのシャトルは球の一種です。球といえば丸いボールが一般的ですが、水鳥シャトルは16枚の羽根がコルク台に埋め込んであります。この形状が丸いボールとは異なる飛び方を生み出す源です。
②近代スポーツの歴史について 私たちが普段スポーツとっている種目の半分くらいは英国で整備され、制度化されたものです。それらのほとんどが、19世紀後半以降に競技化されました。日本には19世紀末になって伝来したものが多くあります。	⑦バドミントンのスマッシュは初速が時速400km以上？ バドミントンは球技の中でいちばん初速が速いといわれていて、一流男子では時速400kmを超えるといわれています。テニスのサーブは200～250kmくらい。大リーグピッチャーの速い記録は、約160～170kmです。
③羽根つき遊びの歴史について 大昔から世界各国にバドミントンの原型と考えられる羽根つき遊びがありました。例えば、16～17世紀頃に英国やヨーロッパの上流階級の人々が楽しんでいた「バトリア・アンド・シャトルコック」と遊びが有名です。	⑧バドミントンのラケットの長さや大きさは、以前は決まらなかった。だからといって、大きすぎる物や長すぎる物が使われていたかといえば、そんなことはありません。プレーするのに、ちょうど良い長さや大きさは、体格（身長や腕の長さ）に見合うと考えられます。
④バドミントンの歴史について スポーツとしてのバドミントンは、イギリスのハンブシャー州という所で14のクラブが集まってバドミントン協会が結成された1893年頃が始まりと考えられます。	⑨バドミントンのネットの高さは支柱が155cmで、コート中央が152.4cmです。この高さは1898年から変わっていません。ただ、子供から大人に関係なく同じ高さというのは、考え直しても良いかもしれません。
⑤日本へのバドミントンの伝来 スポーツとしてのバドミントンを最初に日本に紹介したのはアメリカ人のブラウン氏だといわれています。1919年11月のことです。	⑩バドミントンの最も由緒ある大会には、トマス杯(男子)とユース杯(女子)があります。これは国別対抗戦です。2014年の大会で、日本男子は初優勝、女子は準優勝に輝きました。これは快挙です！

表 6 は、低学年用のバドミントンに関わる運動遊びとゲームの内容である。①～④はシャトルを用いたスローイング（投球）の経験を豊富にさせることが目的になる。①と②では、正確に的に当てることと、籠に投げ入れる正確性（器用さ）が求められる。⑤と⑥はシャトルの飛行特性を横や下から観察させるものである。⑦と⑧は反射神経のトレーニングが目的である。⑨と⑩は両手と片手のキャッチング（捕球）をゲーム形式でおこなう。⑪と⑫はシャトルを片手で投げ、パートナーが両手で捕る課題である。投げる距離については、両課題とも 5～6 m 位が全員の到達目標と考えられる。なお、身体の調和的な発育・発達の観点から、非利き腕（手）でのスローもおこなうことにした。

表 6 低学年のバドミントンに関わる運動遊びとゲームの内容

①シャトルをシャトルケース(筒)に当てるゲーム	班対抗	1m→ 1.5m→ 2m	1人2個
②シャトルをかごに投げ入れるゲーム	班対抗	1.5m→ 2.0m→ 2.5m	1人2個
③シャトル合戦	班対抗	相手エンドに多く入れる	拾って投げる できるだけ遠くに投げよう 時間制
④シャトルがいちばん遠くに投げられるのは誰かな？	記録会		
⑤ノックされたシャトルの飛び方を横から見て観察しよう	個別		
⑥ノックされたシャトルの飛び方を下から見て観察しよう	個別		
⑦2人組になり、1人がシャトルを持つ。腕を伸ばして頭の上に構えます。シャトルを放したら、ペアは利き手でつかみます。→目の高さ→胸の高さ			
⑧次はシャトルが2個になります。シャトルに集中しないと取れません。要領は⑦と同じ			
⑨ノックされたシャトルを両手でキャッチするゲーム(捕ったらコートから出られる)	班対抗		
タイムが速いほうが勝ち	時間制	ネット前ネット越えでエンドラインまでノックする	
⑩今度は片手でキャッチするゲームです。利き手で必ず取ってください。要領は⑨と同じ			
⑪キャッチ&スロー	2人組	2m間隔→	だんだん長くしていく
⑫キャッチ&スロー	2人組	非利き腕でも投げよう	2m間隔→ だんだん長く

表7 中学年のバドミントンに関わる運動遊びとゲームの内容

①シャトルを立てて手の平にのせる。→倒れないようにして歩いてみよう。腕を上下、左右に動かしたり、ジャンプしてみよう	⑧シャトルをJRにのせて片足立ちで膝をゆっくり曲げてみよう(右、左)
②今度は反対の手でやってみよう	⑨シャトルをJRにのせてジャンプしても落とさない
③シャトルをJRにのせる。 どんなのせ方があるか発表してください	⑩シャトルをJRにのせた状態で10m歩き、ラインから30cm離れた籠に入れるゲーム。班対抗 帰りは走ってきてラケットとシャトルを渡し次の人
④シャトルをJRにのせて腕を上下に動かしても落とさない	⑪シャトルをJRにのせた状態で10m歩き、ラインから100cm離れた籠に(下手から)放り出して入れるゲーム。班対抗 帰りは走ってきてタッチで次の人 *⑩⑪かごに入れるのを失敗したら、シャトルを拾いラインから再度行う
⑤シャトルをJRにのせて腕を左右に動かしても落とさない	⑫シャトルをJRにのせて状態で後ろ向きに10m歩きながら運ぶリレー。ラインに着いたらタッチで次の人
⑥シャトルをJRにのせて屈伸運動をしても落とさない	⑬シャトルをJRにのせた状態で20m歩き、コーンを回旋するリレー。班対抗 *シャトルののせ方は任意、スタート・ゴールラインよりも3m後ろにコーンは置く タッチで次の人
⑦シャトルをJRにのせて片足立ちになる(右、左)	⑭シャトルをJRにのせて回旋リレー 走る コーン2個(10m, 20m地点) 班対抗 *シャトルを落としたら、その場で拾って再開する

表7は、中学年用のバドミントンに関わる運動遊びとゲームの内容である。①と②は手のひらにシャトルをのせてバランスを取りながら歩く課題である。③～⑨はジュニア用ラケット（JRと略した）にシャトルをのせてバランスを取って歩くことと、体勢を様々に変化させておこなう課題である。⑩～⑭では応用課題としてのゲーム及びリレーをおこなう。

表8は、高学年用のバドミントンに関わる運動遊びとゲームの内容である。①と②はジュニア用ラケットのハンドルを握って、正確な握り方を学ぶ課題であり、その後に基本の構えとしての③に繋げる。④～⑭については、筆者が論文（2010）や著書（1995, 2010）等で既に公表している課題のため、説明は割愛する。

表8 高学年のバドミントンに関わる運動遊びとゲームの内容

①次はJRを握ってみましょう。まず、JRのハンドル部分に小指と薬指をかけてください。次に親指をかけ、残りの2本の指も添えて軽く握ってください。	⑭弛んだネットを挟み、シャトルをペアと向き合って突いてみよう(フォア面)
②これでラケットの握りは出来上がりです。次に、握ったまま、手首を上を持ち上げるようにしてください。ラケットを持っていない腕も同じように挙げましょう。	⑮弛んだネットを挟み、シャトルをペアと向き合って突いてみよう(バック面)
③そのまま両足を肩幅くらいに開いてください。やや片足(利き腕側の脚)を前にしてください。これが基本の構え方です。	⑯弛んだネットを挟み、シャトルをペアと向き合って突いてみよう(交互面)
④ネットなしのシャトル突き(フォア面、バック面) 1人	⑰次にネットを張りながら上げていき、上記⑪～⑬と同様に行う。
⑤ネットなしのシャトル突き(交互面)1人	⑱正規のネットの高さで打ち出してみよう
⑥ネットなしのシャトル突き(面自由) 複数人 慣れてきたら班対抗ゲーム	⑲打ち出しからヘアピンの応酬のゲーム。ミスしたら打ち出すほうを変える
⑦シャトル高低突き(フォア面、バック面)1人	⑳ショートサービス練習(フォア面・バック面) * ⑭～㉑までは、正面のペアと行う
⑧シャトル高低突き(交互面)1人	㉑上記 対角線上のペアと行う
⑨シャトルを突きながら歩く(フォア面)1人	㉒ショートサービスからヘアピンの応酬のゲーム。 2組で行う サービスは対角線上へ
⑩シャトルを突きながら歩く(バック面)1人	* ⑭～㉒はアンダーアーム ラケットはJR
⑪シャトルを突きながら歩く(交互面)1人	
⑫シャトルを突きながら小走り(フォア面)1人	
⑬シャトルを突きながら小走り(バック面)1人 * ④～⑬はアンダーアーム ラケットはJR	

IV 結語

本稿の目的は、ネット型スポーツのバドミントンを小学校体育科で教材化するための基礎的資料を得ることであり、第1に、我が国の学習指導要領(学校体育指導要綱を含む)における「ボール運動(ボール遊びを含む)」及び「球技」領域の内容の変遷をまとめた。その結果、現行の小学校学習指導要領体育科及び解説体育編までに、「バドミントン」及び「バドミントンに関わる種目や運動遊び」は、一度も例示されていないことが分かった。それに対して、現行の中学校及び高等学校学習指導要領保健体育科では「E 球技」で、選択履修が可能なネット型(スポーツ運動種目)として、ラケットを操作するバドミントンと卓球及びテニスが示されている。つまり、小学校から高等学校までが一貫指導の体系を考慮した内容とはなっていない。そのため第2としては、小学校におけるバドミントンの導入段階と準備段階並びに初期段階の学習プログラム(ドリル)を提案した。

今後の課題は、試作した学習プログラム(ドリル)を小学生対象のバドミントン教室等

で検証し、必要な修正を加えて教材化することである。

＜謝辞＞本稿の執筆にあたり、新潟大学の牛山幸彦教授並びに大庭昌昭准教授と雲尾周准教授から助言をいただいた。あらためて深謝申し上げます。

文献

- E. バイヤー編：朝岡正雄監訳（1993）日独英仏対照 スポーツ科学辞典. 大修館書店：東京, pp. 105-107.
- 猪谷千春（2013）IOC オリンピックを動かす巨大組織. 新潮社：東京, p. 200.
- 伊藤基記（1971）中学体育におけるバドミントンの指導. 新体育, 41-9:73-76.
- 木原成一郎（2002）体育科の目的・目標. 松田泰定・木原成一郎共編 初等体育科教育の研究. 学術図書出版社：東京, pp. 2-20.
- 岸一弘（2007）バドミントンの楽しみ方. 共愛学園前橋国際大学論集, 7:17-35.
- 岸一弘（2010）バドミントンを知る本. 共愛学園前橋国際大学ブックレットⅡ. 上毛新聞社事業局出版部:群馬, p. 18.
- 岸一弘・牛山幸彦・大庭昌昭（2014）ネット型スポーツの一貫指導に関わる研究：小学校体育科におけるバドミントンの教材化にむけて. 日本体育学会第 65 回岩手大会口頭発表配布資料.
- 国立教育政策研究所（2014）学習指導要領データベース. 国立教育政策研究所学習指導要領データベース作成委員会. <http://www.nier.go.jp/guideline/2014.8.31>.
- 小西友七・南出康世編（2001）ジーニアス英和大辞典. 大修館書店：東京, p. 174.
- 文部省（1947）学校体育指導要綱. 日本書籍：東京.
- 文部省（1968）小学校学習指導要領. 帝国地方行政学会：東京.
- 文部省（1969）中学校学習指導要領大蔵省印刷局：東京.
- 文部省（1977a）小学校学習指導要領. 大蔵省印刷局：東京.
- 文部省（1977b）中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局：東京.
- 文部省（1978）高等学校学習指導要領. 大蔵省印刷局：東京.
- 文部省（1989）高等学校学習指導要領. 大蔵省印刷局：東京.
- 文部省（1989a）小学校学習指導要領. 大蔵省印刷局：東京.
- 文部省（1989b）中学校学習指導要領. 大蔵省印刷局：東京.
- 文部省（1989c）中学校指導書保健体育編. 大日本図書：東京.
- 文部省（1989d）高等学校学習指導要領解説保健体育編体育編. 東山書房：京都.
- 文部省（1998a）小学校学習指導要領. ぎょうせい：東京.
- 文部省（1998b）中学校学習指導要領. ぎょうせい：東京.
- 文部省（1999）高等学校学習指導要領案. 時事通信社：東京.

- 文部科学省（2005）中央教育審議会初等中等教育文化会教育課程部会教育課程企画特別部会（第8回）配布資料[資料3] 学習指導要領（解説）等の位置付けについて
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryo/05063002/003.htm.
- 文部科学省（2008a）小学校学習指導要領. 東洋館出版社：東京.
- 文部科学省（2008b）小学校学習指導要領解説 体育編. 東洋館出版社：東京.
- 文部科学省（2008c）中学校学習指導要領. 東山書房：京都.
- 文部科学省（2008d）中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房：京都.
- 文部科学省（2009a）高等学校学習指導要領. 東山書房：京都.
- 文部科学省（2009b）高等学校学習指導要領解説 保健体育編体育編. 東山書房：京都.
- 文部科学省（2010）学校体育実技指導資料 第8集 ゲーム及びボール運動. 東洋館出版社：東京.
- 本橋美佳・阿部一佳・佐々木道子・高橋幸治（1998）わが国の学習指導要領におけるバドミントンの取り扱いに関する研究 1947-1989. 大学体育研究, 20:51-73.
- 中島 海（1930）學校體育文庫第7巻 小學校體育. 一成社：東京, p. 130.
- 奈良重幸（1991）Q9 バドミントンは、ボールゲーム（球技）ですか. 稲垣正浩編, 「先生なぜですか」0のことをなぜラブと呼ぶの?. 大修館書店：東京, pp. 112-113.
- 佐々木等（1930）學校體育文庫第5巻 球技指導法. 一成社：東京.
- 佐藤善人（2006）対人ネット型の個人種目に関する一考察：小学校体育におけるラケットを扱うボール運動の可能性. 東京学芸大学附属学校研究紀要, 33:103-112.
- 寒川恒夫・野々宮徹（1987）ボール. 日本体育協会監修, 岸野雄三代表編集, 最新スポーツ大辞典. 大修館書店：東京, pp. 1204-1207.
- 高山一弘（1995）初心者と指導者のためのバドミントン教本. 上毛新聞社出版局：群馬, pp. 22-63.
- 友添秀則（2010）体育の目標と内容. 高橋健夫ほか編著 新版体育科教育学入門. 大修館書店, pp. 30-38.
- 宇土正彦（1993）体育授業五十年 ●新しい体育のために. 大修館書店：東京, pp. 5-63.
- 山本貞美（1983）若い体育の先生に. 黎明書房：愛知.

Abstract

Teaching-materials development in connection with badminton in elementary school physical education (tentative plan)

Kazuhiro KISHI

The purpose of this research is to develop teaching materials for badminton in elementary school physical education classes through the study of basic play in this net sport.

The first focus is to better approach coaching (including a "guide to school physical education") through the study of "ball movements" (including ball play) and "ball games". The second focus is a prototype learning program (drill) for the introduction stage, preparation stage and further early stages of badminton. Further research is necessary in order to validate the learning program (drill) that I made for badminton classes for primary schoolchildren and to make teaching materials for this program.